

博士(理学)

小谷太郎 著 Taro Kotani

なぜ科学者は平気でウソをつくのか  
捏造と撤回の科学史

Forest  
2545  
Shinsho

## 謝辞

韓国語資料については小谷桜氏に御教示いただきました。藤岡毅博士にはルイセンコ事件関係者の消息について御教示いただきました。お礼申し上げます。

## はじめに

科学の世界にはときおり捏造ねつぞうが登場します。

ある研究者の大発見が世間を驚かしますが、他の研究者が追試しても、同じ結果が得られません。やがて論文に画像の細工と文章の剽窃ひょうせつが見つかり、すべてはでっち上げだったと判明します。大発見は幻でした。

こうした科学の捏造事件は、どういわけか、私たちの興味を奇妙ひに惹きつけます。捏造は「面白い」のです。

人間は様々な動機から嘘うそをつきます。コミュニケーションの中で成功したい、承認されたい、利益が欲しいといった、利己的な理由からつく嘘があります。他人を操作したい、傷つけたといった悪意のある嘘もあるでしょう。また、いくら考えても合理的に説明でき

ない、不可解な嘘をつく人もいます。

嘘の中でも科学の捏造には際立つ特徴があります。捏造研究者は大発見を報告します。常識を覆し、人々の認識を変え、社会を変革する成果が得られたと主張します。そういう科学の新たな勝利に、私たちは感嘆し、胸躍らせます。

いい換えると、科学の捏造には「夢」があるのです。

本書では、研究者の皮をかぶったクリエーターの夢の名残を紹介します。

中国は武漢から始まった新型コロナウイルス感染症。その膨大な感染者のデータをすべて集めて分析すれば、特效薬を見つけることができるのではないのでしょうか。デサイ博士は10万人もの治験データから、治療薬の効果を分析しました。イベルメクチンがCOVID-19に有効だという噂は買い占め騒動を引き起こしました。しかしデサイ博士は、その治験データを共同研究者にさえ見せようとしませんでした。

試験管で核融合を起こしたとぶち上げたポンス教授とユタ大は、アメリカ下院に2500万ドルの研究予算を要求しました。しかし常温核融合は研究者から罵々たる批判を浴び、ポンス教授は失踪します。

史上最高の捏造研究者シェーン博士は、魔法のような性能を持つナノテク素子を次から次へと作製し、大量の論文を生産しました。しかし調査委員会がその試料を確認しようとしたところ、シェーン博士は1個も提示できませんでした。

まだ記憶に新しいSTAP細胞と、その先輩にあたる韓国の事件、ヒトES細胞は、もし本当ならば、難病を治し、医療を革新するはずでした。

マウスの皮膚移植に成功したといい張るサマーリン医師は、思い余ってマウスにペンでぶちを描き入れてしまいました。

日本勢も負けてはいません。石器掘りの神様こと藤村新一氏が地面を掘じくり返すと、数十万年前の旧石器が転がり出ます。世界最古の原人文化に考古学研究者は感激して議論しました。(知的なはずの研究者や権威ある大学教授が幼稚な手口に騙されて狼狽するのも、捏造事件の「面白さ」です。)

こうして科学史に燦然と輝く捏造事件を調べていくと、ある悲しい結論に到達します。それは、捏造を科学から根絶することはできないということです。

科学の発展のためには、誰でも自由に研究を行ない自由に発表できる必要があります。

そしてそういう環境では必然的にある割合で捏造が発生するのです。「正しい」研究活動を促進すると、捏造・誇張・誤謬ごびやうも紛れ込むのです。

もしも「正しくない」研究を根絶するため、研究者を倫理や社会道徳に合致しているかチェックし、発表の自由を制限したら、学問は停滞し、社会に多大な悪影響がもたらされるでしょう。

そのことはかつてソ連において最悪の形で実証されました。当時の政治思想と合致しているとされたルイセンコ学説が、大勢の研究者や市民の人生を破壊し、命を奪い、ソ連社会とそれから世界のマルクス主義運動に深刻なダメージを与えるさまは、第7章で紹介します。

捏造を根絶することはできません。しかしだからといって捏造はやり放題というわけでもありません。捏造は必ず発覚します。捏造された研究成果は自然科学の法則に反するため、追試は失敗し、他の研究結果と矛盾し、遅かれ早かれ否定されます。

つまり、科学は異物を排除する免疫機構を備えているのです。

本書のテーマは科学史です。といっても、登場するのは偉大な科学者ではありません。大発見の瞬間が描写されるのでもありません。登場するのは誘惑に弱い人間で、あつかわれるのは過ちあやまの瞬間です。彼ら彼女らの叶かなわなかった夢と野望が社会に波乱を及ぼすさまを、歴史上の事件として記述するのが目的です。

そういう事件を紹介するにあたって、本書は科学を軸とし、科学の観点から論じます。捏造の舞台は派手な記者会見ではなく科学論文そのものであるという考えから、撤回された論文をできる限り入手して、一文一文を読み込みました。それがどれほど革新的な論文だったか、理解するための基礎知識を、なるべく平易に解説しました。捏造事件について読むうちに、その分野の知識も得られる本が、本書の目指すところです。

とはいえ捏造研究者の活躍分野は多岐にわたります。筆者の専門分野外の論文も少なからずあり、読み違いをしている箇所もあるかもしれません。ミスを見つけたらご指摘ください。

なぜ科学者は平気でウソをつくのか——目次

## 第1章 10万人のCOVID-19治験データ サージスフィア事件

パンデミック 18

COVID-19を迎え撃つ先端科学 22

疑惑のヒドロキシクロキン 25

事件後と事件前 31

まとめと評価——捏造は瞬時に指摘される時代に 33

## 第2章 常温核融合 大学間の対抗意識から始まった誤りの連鎖

ユタの核開発競争 40

発端は研究助成申請書 42

急ごしらえの世紀の発表 46

いまだ実現しない人類の夢 49

世界的に巻き起こったファイバー 54

ポーンズ教授の奇妙なガンマ線 59

そして信者が残った 65

まとめと評価——いまだに信じる人もいる 67

## 第3章 ナノテク・トランジスタ 史上最大の捏造・ベル研事件

8日に1本の第一級論文を発表する若き天才研究者 72

別の論文のグラフにそっくり? 75

絢爛豪華な実績の数々 78

同僚が偶然、捏造を発見 87

捏造者に共通する弁明 91

まとめと評価——革命級のホラ話 93

## 第4章 ヒトES細胞 スター科学者の栄光と転落

- 「第一号最高科学者」 102  
禁断のヒト・クローン 105  
疑惑報道と熱狂的な支持者 109  
よくいえば大胆、悪くいえば稚拙 110  
真犯人 114  
まとめと評価——本当なら「夢のある捏造」 119

## 第5章 STAP細胞 捏造を異物として排斥する「科学の免疫機能」

- リケジョ旋風 124  
万能細胞の開く新しい医療 128  
論文までの苦難の道のり 133

## 第6章 118番元素 新元素発見競争でトップを狙ったバークレー研事件

- うっかりミスはありえない 141  
広がる波紋 145  
手品の種明かし 151  
まとめと評価——科学の免疫機能が素早く働く 152  
まだ誰も見たことのない合成実験 162  
栄誉ある新元素発見 163  
ドイツからやってきた錬金術師 167  
世界のトップに躍り出たバークレー研 169  
消えた118番元素 173  
まとめと評価——関心の高い分野で巧妙に 179

## 第7章 農業生物学 スターリンが認めたルイセンコ学説

- 「ブラボー、同志ルイセンコ、ブラボー！」 184
- 学術論争がイデオロギー論争に 186
- 弁証法的唯物論に基づく学説 189
- ルイセンコ、農業アカデミー総裁に 197
- 遺伝学研究所を乗っ取る 198
- アカデミー総会へのスターリンの介入 200
- 驕れる者久しからず 202
- まとめと評価——悪意に満ちた論文 204

## 第8章 皮膚移植 サマーリンのぶちネズミ

- 簡単な方法で皮膚移植が実現？ 210

## 第9章 旧石器遺跡 暴かれた「神の手」の正体

- 誰にも信じてもらえない 211
- 黒いぶちの正体 214
- 知的なはずの医学研究者が？ 217
- まとめと評価——捏造発覚までの最短記録 219
- 隠しカメラがとらえた瞬間 224
- 日本に前期旧石器時代はあったのか 228
- 超能力者のごとき扱い 231
- 考古学者の悪夢 234
- 「教育委員会」対「神の手」 236
- 原人ラーメン、原人クツキーにマスケットまで 238
- 発覚後、周囲の研究者たちは 241
- 最大規模の検証 244

まとめと評価——働かなかった「科学の捏造排除機能」  
246

索引  
257

## 第1章

# 10万人のCOVID-19 治療データ

サージスファイア事件

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症COVID-19は、またたくまに全世界に蔓延し、莫大な感染者と死者を出しました。2021年の本書執筆時点で、まだパンデミックは終わっていません。

COVID-19のため、医学と分子生物学の手法は大きく変化しました。第一に、莫大な数の論文が短期間で生産されました。第二に、それらの論文のうち多くが、査読という通常の手順を経ずに、学術誌掲載前のプレプリントとして流通し、治療法や政策に影響をおよぼしました。そして第三に、撤回される論文も記録的な数にのぼったのです。

## パンデミック

まず、この世界的大流行（パンデミック）の経緯を振り返りましょう。

2019年12月31日、中国武漢で肺炎患者が44人発生したことが報告され、2020年1月5日には世界保健機関（WHO）が未知の感染症について警告を発しました。これが新型コロナウイルス感染症「COVID-19（CoronaVirus Disease 2019）」の始まりでした。

COVID-19を引き起こす新型コロナウイルスは「重症急性呼吸器症候群関連コロナウイルス」を意味する「SARS-CoV-2 (Severe Acute Respiratory Syndrome CoronaVirus 2)」と名づけられました。なんだかややこしいですが、「COVID-19」は病気の名称で、「SARS-CoV-2」はその原因となるウイルスを指します。

「コロナウイルス」の仲間はいわゆる風邪の病原体です。ヒトに風邪を引き起こす主なコロナウイルスは4種類います。この4種のコロナウイルスに感染しても、つまり風邪をひいても、ほとんどの場合は軽快します。

しかし自然界ではときおり、他の動物を宿主としていたウイルスが、なんらかの偶然により、ヒトに感染することがあります。勝手の違うヒトの体内でそのウイルスが増殖できたり、さらにヒト個体からヒト個体へ感染できるとは限らないのですが、極々まれに、両方に成功して病気を引き起こす場合があります。そうなると新型のウイルス感染症の発生です。COVID-19もそういう不幸な例でした。

新型コロナウイルスSARS-CoV-2は、もともとコウモリを宿主としていたと考えられています。それがヒト個体に感染したところ、思いもよらぬ高い感染力と致死力を発揮したようです。

おそらく読者のみなさんは、COVID-19の性質についてすでにうんざりするほど

聞かされているでしょうから、なるべく簡潔に述べます。COVID-19には、インフルエンザやありふれた4種のコロナウイルスによる風邪と異なる、三つの恐るべき特徴がありました。

一つ目は感染力が高いことです。1人の感染者が数十人に感染させた例も報告されました。感染者の吐く息に含まれる微細な飛沫には、SARS-CoV-2のウイルス粒子が無数に潜んでいます。咳やくしゃみだけではなく、普通の会話でも感染力のある飛沫が放出される点がCOVID-19の特徴です。

二つ目は、多くの感染者が無症状か軽症で、感染に気づかないことです。感染者のうち症状が表れるのは、5人に1人とも、半数程度ともいわれています。無症状の感染者は（PCR検査を受けないかぎり）それと知らずに周囲と接触し、ウイルスを広めます。そして三つ目は、きわめて致死率が高いことです。COVID-19は感染者のうち0・5〜2%が死亡すると見積もられています。例えば別の致死率的ウイルス感染症であるインフルエンザは、日本では感染者の0・002〜0・02%が死亡します。COVID-19はこれに比べて10倍〜1000倍の圧倒的な致死率です。

このかつてない強力な感染症は、武漢にまたたくまに蔓延しました。最初の報告からたった1ヶ月で累計感染者は3万人を超え、新規感染者は毎日3000人増え、死者は最終的に中国全土で4000人以上にのぼりました。世界は不安な面持ちで中国情勢を見守りました。

中国政府は武漢をはじめとする都市に外出禁止令を出してロックダウンし、数万床の入院病棟を約10日で建設しました。都市に出入りする者に感染検査を義務づけ、入国者は2週間隔離しました。

こうした強権的で荒っぽい対策は効き目があり、中国の国内新規患者は3月には激減しました。世界最初にCOVID-19の大流行が生じた中国は、世界最初にこれを制圧した国となりました。

しかしこの間に、ウイルスSARS-CoV-2は世界に流出しました。2月末にはイタリアとスペインで累計感染者が10000人を超え、イランがそれに続きました。3月には1000を超える国で感染が発生し、そこから中の国に感染者がいる状態になりました。累計感染者は10万人を突破しました。

2020年3月11日にWHOはパンデミックを宣言します。

そしてその後の世界は、あらゆる国が全力で感染者数を増やすレースをしているような様相を示しました。どの国でも、手をこまねいているうちに感染者が爆発的に増え、重症者で病院はあふれ、死者数のグラフが上がっていきました。

医療関係者は疲弊し、外出禁止や自粛で街に人がなくなり、馴染みの店が次々閉店し、人々はマスクをつけ交流を避け、世の中の様子はすっかり変わりました。

2021年本書執筆時点で、世界の累計感染者は1億人を超え、死者は250万人を超えています。

## COVID-19を迎え撃つ先端科学

地球規模のパンデミックは、1918年〜1920年のスペイン風邪（5000万人〜1億人以上死亡）や、1957年〜1958年のアジア風邪（100万人以上死亡）など、これまで数回発生したことがあります。いずれも大きな被害と恐ろしい記憶を残しました。

しかし今回のCOVID-19は、これら歴史的パンデミックと決定的に違う点があります。現在の人類が分子生物学の知識を蓄積し、ウイルスの構造を解析する手段を持ち、高度な遺伝子関連技術を開発していることです。

2020年1月11日、中国の研究者によってSARS-CoV-2の遺伝子配列が読み取られ、インターネット上の遺伝子データベースにて公開されました〔注1〕。最初の報告からたったの11日後です。

例えばインフルエンザの場合、1931年にウイルスが確認されてから、1981年に遺伝子配列が読み取られるまで、50年かかりました。それに比べると驚異的な早さです。

この高速化は、「ポリメラーゼ連鎖反応」または「PCR (Polymerase Chain Reaction)」と呼ばれる技術によって実現しました。PCRは生物の遺伝情報であるDNAを大量に複製して増やします。遺伝子配列の読み取りは、かつては何年もかかる大変な事業でしたが、今ではPCR（と、他の多くの技術革新）のおかげで、ほんの数時間で行なえます。PCRは（ウイルスだけでなく）広く生物の遺伝子情報の読み取りに利用されて、生物学や医学や農業や人類学など多くの分野を書き換え中です。

SARS-CoV-2の場合、1月11日の最初の報告を皮切りに、世界中の患者からSARS-CoV-2の遺伝子配列が次々に読み取られて公開されました。データベースには現在数千株の配

列が登録されています。

こうしたデータベースからは、ウイルスの変異や伝播状況や感染経路が、いまだかつてない詳細さで突き止められています。また、COVID-19のために実用化されたmRNA（メッセンジャーRNA）ワクチンは、まったく新しい医療技術で、今後の人類と感染症との戦いを変えていく可能性があります。

これらの例が示すように、COVID-19のおかげで医療科学と生命科学は大きく進展したといえます。

COVID-19についての知識は急激に集積され、大勢の研究者によって科学論文が大量かつ迅速に生みだされました。2020年中に発表されたCOVID-19関連の論文は、10万本とも20万本ともいわれます（注2）。

このパンデミックのもとでは、科学論文が通常たどる、査読と書き直し、続いて受理（または掲載拒否）、そして出版という手順は時間がかかりすぎるため、実質的な簡略化が進みました。多くの論文が査読と受理を待たず、投稿と同時にインターネット上に公開されました。そういう掲載前に公開された論文は「プレプリント」と呼ばれます。

そうして大量かつ迅速に生み出された論文には、残念ながら質の低いものも混じっていました。2020年はまた、100本近い論文が撤回された年でもあります（注2に同じ）。そして質の低い論文がすべて撤回されるわけではありません。

撤回の理由は、編集部による二重掲載などの単純ミスもあれば、内容の誤りによるもの、理由が公開されていないものなど、様々です。

そして中には、（本書のテーマである）捏造論文ねつぞうろんぶんも含まれていたのです。

## 疑惑のヒドロキシクロロキン

2020年5月23日、WHOは「ヒドロキシクロロキン」という薬によるCOVID-19の試験治療を一時休止することに決めました。その安全性に疑問が高まっているというのです。

ヒドロキシクロロキンはマラリアの治療薬です。当時様々な医薬品が、COVID-19の治療薬として使えないか検討されていましたが、ヒドロキシクロロキンはその一つでした。

WHOの心配の原因は、医学誌『ランセット』に掲載された、『マクロライドを用いる

場合と用いない場合のヒドロキシクロロキンとクロロキンによるCOVID-19治療…複数国の登録データ解析〔注3〕』という論文にありました。

論文の著者はブリガム・アンド・ウィメンズ病院のマンディーブ・R・メーラ（1967〜）医長、サージスファイア社のサパン・S・デサイ（1979〜）博士、チューリッヒ大学病院のフランク・ロシツカ（生没年不詳）教授、ユタ大学のアミット・N・パテル（生没年不詳）医師です。

それによると、6ヶ国671の医療機関から集めた9万6000人のCOVID-19患者のデータを解析したところ、ヒドロキシクロロキンはCOVID-19患者の容態を改善しなかったということです。それどころか、死亡率を高め、心疾患を誘発するといえます。別の抗マラリア薬「クロロキン」の場合も同様の結果です。抗生物質マクロライドは併用してもしなくても変わらないとのこと。

薬が効かないばかりか、COVID-19の患者に害があるかもしれないとなると、ことは重大です。しかもそれは、約10万人もの膨大な治療データから得られた結果だといえます。WHOが心配するのも当然でしょう。

メーラ医長、デサイ博士、パテル医師らは、この論文の少し前の2020年5月1日に、別の論文を『ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシン』に発表していました。『心血管疾患、薬物療法、COVID-19による死亡率〔注4〕』です。こちらはアジア、ヨーロッパ、アメリカの169の病院の患者8910人のデータを用いた研究だといいます。

この論文によると、心血管に疾患を持つ患者はCOVID-19で死亡する率が高いそうです。ただし心血管疾患の薬物療法は、死亡率に影響をもたらさないという結果です。（関係者は一安心です。）

それにしても、『ランセット』と『ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシン』は医学分野のトップジャーナルです。評判が高く信頼されている学術誌であり、当然のことながら査読も厳しいため、ここに論文を受理してもらうのは簡単ではありません。それに立って続けに論文を掲載するとは、どうも大変に優秀な研究者グループのようです。

メーラ医長とデサイ博士とパテル医師らは、また別の重要論文を発表していました。

2020年4月の初めごろにプレプリント・サーバISSRN (Social Science Research Network) に投稿された『COVID-19に対するイベルメクチンの有効性(注5)』です。

これは1408人の患者のデータを用いたというもので、抗寄生虫薬イベルメクチンがCOVID-19の治療薬として使えるという、希望の持てる研究です。

イベルメクチンは、大村智(1935~)北里大学特別荣誉教授が地中の細菌から見つけた物質です。線虫という生物グループを殺すもので、様々な恐ろしい寄生虫症から大勢の人々を救いました。大村智荣誉教授はこの功績でノーベル生理学・医学賞を受賞しました。

そのイベルメクチンがCOVID-19に効き目がありそうだという研究結果は、日本人には嬉しいニュースですが、世界にも大いなる期待を持って受けとめられました。

特に、ペルーをはじめとするラテンアメリカの国では、イベルメクチンがCOVID-19に有効だと政府が発表したため、薬局のイベルメクチンはたちまち売り切れ、人々はペット用の寄生虫駆除薬まで買い漁るという騒動になりました。

これらの研究は、イベルメクチンを投与されたCOVID-19患者や、ヒドロキシク

ロキンを投与されたCOVID-19患者などの、何万人分ものデータを集めて分析したものだといいます。

しかしバンデミックが始まってからほんの1ヶ月ほどで、そんなに大量のデータを集められるのでしょうか。それぞれの医師と病院がでんばらなやり方で記録した治療データを、10万人分も整理してデータベースに入力するなんて、考えただけで気が遠くなります。また法的な問題はないのでしょうか。10万人のCOVID-19患者が、自分のデータを研究に用いることを承諾したかどうか、本当に確認したのでしょうか。

それを約1ヶ月でやってのけたのは、デサイ博士が創立した『サージスフィア』という企業だといいます。

デサイ博士とは何者なのでしょうか。

サージスフィアはデサイ博士が経営する教科書販売会社です。

デサイ博士は経営者であり、心血管疾患を専門とする医師でもあります。そしてこの事件が起きた後で、メディアが調べたところによると(注6)、共著者の1人のパテル医師とは、結婚による義兄弟の関係にあります。

問題の3本の論文のうちの2本の筆頭著者であるメーラ医長は、パテル医師の紹介で、デサイ博士と知り合ったといえます。

こう聞くと仲の良さそうな3人ですが、論文に対する疑念が業界に沸き起こると、その後の対応は分かれませんでした。

論文は、膨大な患者データをどうやって集めたかを説明していかないばかりでなく、多数の不審な点がありました。例えば患者のうち喫煙者の割合は、どの国の患者もほとんど同じで、これは統計的にありえません。

疑惑を抱いた約200名の研究者らは、2020年5月28日に論文著者と『ランセット』に対して〈注7〉、6月2日には論文著者と『ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシン』に対して公開書簡を送り〈注8〉、論文に対する懸念を表明しました。

デサイ博士を除いた論文共著者たちは、デサイ博士に対し、10万人分の生データを見せるように要求しました。それまで患者データはデサイ博士が独占し、データ解析も独りでこなっていました。

しかしデサイ博士はデータを見せることを拒否しました。「プライバシーを守るとい

協定があるから」というのがそのいいわけでした。

これを受けて、デサイ博士を除く共著者たちは、論文の撤回に同意しました。

2020年6月4日、『ランセット』のヒドロキシクロキシン論文と、『ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシン』の心血管疾患論文は撤回されました。

(プレプリント・サーバに投稿されていたイベルメクチンの論文は、5月の時点で、メーラ医長によってひっそり取り下げられていましたが、正確な日付はわかりません。)

これをもって、サージスファイア事件は科学的には終了しました。

## 事件後と事件前

2020年6月3日、ヒドロキシクロキシン論文とデサイ博士の主張がおかしいことが誰の目にも明らかになって、WHOはヒドロキシクロキシンの試験の再開を発表しました。試験が休止されていたのは、5月23日から6月2日までの10日間でした。

しかしその後の試験で、ヒドロキシクロキシンは、COVID-19治療薬としては大した効果を発揮しませんでした。7月4日、WHOはヒドロキシクロキシンをCOVI

D-19 治療薬候補から外しました。

結局、デサイ博士のヒドロキシクロキン論文はCOVID-19治療薬の開発を妨害したのですが、不幸中の幸い、被害は最小限に食い止められました。

一方、デサイ博士のイベルメクチン論文の影響はそれより悪質で深刻です。ペルーで起きたイベルメクチン騒動の引き金になった可能性があります（注9）。

そして現在のところ、イベルメクチンのCOVID-19に対する効果は証明されていません。もし治療効果があるとしても、デサイ博士の論文の主張するほどではないと思われれます。

明らかになった様々な証拠は、問題の3論文が、存在しないデータを基にして書かれたことを示しています。そして関係者のうち、データが存在していると主張しているのはデサイ博士だけです。

本書で紹介する捏造事件では、多くの場合、真相を調べる調査委員会が設置されています。しかしこの事件は（世間のほとんどの捏造事件と同じく）、論文の撤回で事件が

終わり、捏造の首謀者は特定されていません。

けれどもこの事件がデサイ博士の「単独犯行」であることはまず確実でしょう。

捏造論文に詳しいエリザベス・ビク（1966）博士は、デサイ博士の学位論文を調べて、そこに画像捏造の証拠を見つけています（注10）。これはデサイ博士が常習的に捏造していたことを強く示唆します。本書で取り上げる「ベル研究所事件」のシェーン博士と同様に、デサイ博士は学生のころから捏造に手を染めていたと思われる。

### まとめと評価——捏造は瞬時に指摘される時代に

- 発表から撤回まで……1ヶ月
- ストーリーの科学的インパクト……地味
- 捏造の巧妙さ……1日後に指摘
- 社会的影響……致命的
- 総合……☆

まとめとして、この事件を科学における捏造の一つとして評価しておきます。

この捏造論文は、発表から撤回までどれくらい期間「持った」でしょうか。『ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシン』にて2020年5月1日に公開された論文が、6月4日に撤回されています。1ヶ月という比較的短い期間でした。これを、社会を騙しだまおおせた期間の目安として挙げておきます。

これらの論文では、いくつかの治療法や医薬品が、COVID-19に効果や影響があるか述べています。大発見を狙う捏造者なら、特効薬を発見したと発表しそうですが、そういうわけでもなく、ヒドロキシクロキンはむしろ悪影響があることにされています。主張が地味で、ある意味珍しい捏造です。

この捏造の特徴は、結論は地味なのに、用いたデータは10万人という大ボラを吹いていることです。どうも意図がつかみにくい捏造者です。ともあれそのため、データの不自然さが直ちに指摘されました。巧妙な捏造ではありません。

社会的影響は深刻で重大です。COVID-19の間違った治療法の発表は、患者の命に関わります。決して許されません。

捏造された研究論文とその影響、事件としての大きさを総合的に評価して星をつけておきます。影響が笑い事ですまされないことと、主張が地味なために、星1個としておきます。

科学における捏造はときおり世間を騒がせます。捏造ケースにはそれぞれ個性があり、また共通のパターンもあります。本書ではそういう個性とパターンが明らかになることを期待しつつ、科学史に燦然さんぜんと輝く捏造事件を紹介します。(まさかこんな与太話が信じられるとは、こんな手口が通用するとは、という驚きの連続です。)

数々の捏造の事例をたどることにより、我々人類がいかに学ぶことをせず、騙されやすく、信じやすいかを知り、それとともに、逆説的ですが、科学という手法の確かさを確認することが本書の狙いです。

捏造は科学史の一部なのです。

### 教訓

地味で意図のわかりにくい捏造も存在する。主張する内容から捏造は見分けられない。

〈共一〉 Fan Wu, Su Zhao, Bin Yu, Yan-Mei Chen, Wen Wang, Zhi-Gang Song, Yi Hu, Zhao-Wu Tao, Jun-Hua Tian, Yuan-Yuan Pei, Ming-Li Yuan, Yu-Ling Zhang, Fa-Hui Bai, Yi Liu, Qi-Min Wang, Jiao-Jiao Zheng, Lin Xu, Edward C. Holmes, Yong-Zhen Zhang, 2020, “Severe acute respiratory syndrome coronavirus 2 isolate Wuhan-Hu-1, complete genome,” <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/nucleotide/MN908947>

〈共二〉 Holly Elise, 2020, “How a torrent of COVID science changed research publishing—in seven charts,” *Nature*, 588, p553.

〈共三〉 Mandeeep R. Mehra, Sapan S. Desai, Frank Ruschitzka, Amit N. Patel, 2020, “Hydroxychloroquine or chloroquine with or without a macrolide for treatment of COVID-19: a multinational registry analysis,” *Lancet*, May 22 p1. [DOI: 10.1016/S0140-6736\(20\)31181-9](https://doi.org/10.1016/S0140-6736(20)31181-9)

〈共四〉 Mandeeep R. Mehra, Sapan S. Desai, SteyRam Kyu, Timothy D. Henry, Amit N. Patel, 2020, “Cardiovascular Disease, Drug Therapy, and Mortality in COVID-19,” *N. Engl. J. Med.*, 382, e102. [DOI: 10.1056/NEJMc2006768](https://doi.org/10.1056/NEJMc2006768)

〈共五〉 Amit N. Patel, Sapan S. Desai, David W. Grainger, Mandeeep R. Mehra, 2020, “Usefulness of Ivermectin in COVID-19 Illness,” SSRN, [https://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract\\_id=3580524](https://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=3580524) [DOI: 10.2139/ssrn.3580524](https://doi.org/10.2139/ssrn.3580524)

〈共六〉 Matthew Herper, Kate Sheridan, 2020, “Researcher involved in retracted Lancet study has faculty appointment terminated,

as details in scandal emerge,” STAT

〈共七〉 James Watson on the behalf of 201 signatories, 2020, “Concerns regarding the statistical analysis and data,” [https://zenodo.org/record/3871094#\\_yEzZAK0nD0N](https://zenodo.org/record/3871094#_yEzZAK0nD0N)

〈共八〉 James A. Watson, Rasimean Meral, Richard Price, Julie Simpson, on behalf of 174 signatories, 2020, “Expression of concern regarding data integrity and results,” [https://zenodo.org/record/3873178#\\_yEzZb60nD00](https://zenodo.org/record/3873178#_yEzZb60nD00)

〈共九〉 Catherine Offord, 2020, “Surgisphere Sows Confusion About Another Unproven COVID-19 Drug,” *TheScientist*

〈共一〇〉 Elizabeth Bik, 2020, “The Surgisphere Founder and the Melba Toast figure,” <https://scienceintegritydigest.com/2020/06/06/the-surgisphere-founder-and-the-melba-toast-figure/>